



はじめに

群仲のいい人たちの年収は、あなたの年収を表している！?

本書を読み始める前に、まずは、ここ数年、あなたが出会う回数が多い10人をリストアップしてください。

次に、わかる範囲でその人たちの年収を想像してみます。もしも、教えてもらえぬぐらい仲が良ければ、大体の金額を尋ねてみてみましょう。

最後に、それらを合計して人数で割ってください。

こうして出てきた年収の平均値が、何を表していると思いますか？

ズバリ、あなたの年収です。

私はこの話を、あるメンターから聞きました。



当時、私の年収はとても胸の晴れる額ではなかったのですが、たしかに私の周囲の仲間たちと似たりよったりの年収額だと気づき、驚いたものです。

一方、こんなシーンを想像してみてください。

年収数千万の人たちは、どんな方々とつき合っているのかをです。

彼、彼女たちと同じような社会的地位、ステータスの方々と頻繁に会食したり、ゴルフに行ったり……こんな姿が目には浮かんできませんか。

群人生があっさり好転する方法がある！

なぜ、つき合う人を変えるのか——。その理由はいくつもあります。

あらかじめ断っておきますが、つき合う人を変えようといっても、今、仲のいい友人たちや、先輩、後輩、上司とのつき合いをやめるわけではありません。

正確には、「つき合いの幅を広げよう」と言ったほうがいいでしょうか。

私はずっと、自分の現状に満足できていませんでした。

「頑張ればできるはず！」と思っただけのもの、そもそも「何からはじめればいいのか？」がわかりません。

日頃のグダグダ習慣もあいまって、実際に何かをしようとする段階になると、できない言い訳がいくつも浮かび、そこから逃げ出す算段ばかり考えていたように思います。結局、いつまでたっても「はじめの一步」を踏み出せない。

どうしたら将来に対する不安や不満が吹き飛び、毎日、生き生きと、仕事も人生も楽しめるようになるのか？

何か奇跡的なことが起こって、人生が好転する方法はないのか？

実は、あったんです。それが、私が実体験からつかんだ「つき合う人を変えてみる」という方法だったんです。

■私が「はじめの一步」を踏み出せた理由

そうはいっても、「新しい人と出会い、つき合っていくのは大変だ」と思う方も

多いはずです。

こうしたときは一度、自分を振り返ってみませんか。

誰しも「自分のこんな点を直したいな」「こんなふうに変われたらいいな」と思うことはないでしょうか。

でも、何十年に渡って染みついた、自分の考え方や性格、行動習慣などが、ある日を境にしてガラッと変わることはありません。

私からすると、それらを変えるほうが、よっぽど難しく感じたのです。

だからこそ、ずっと、「はじめの一步」が踏み出せなかったわけですから。

もう、自分の意志や努力だけでは、これから先、何十年の過ごし方に変化は訪れない。だったらいっそのこと、誰かの力を借りて、自分が「いい方向」に変わっていきけるよう、後押ししてもらったほうがいい。

実は、すでに経営者として確固たるポジションを築いている人、ある特定の分野で成功している人などは、たとえ現在、能力を發揮できていなくとも、イキがいい



20、30代の若者に目をかけ、可愛がってくれます。

成功者は自分なりにつかんだ仕事や人生に対する哲学、成功ノウハウを、実は、じっくりと聞いてくれる人を求めていたりするのです。

これも私の実体験から断言できます（なかにはもちろん、そうではない人もいますが）。お互い親密な関係になっていくと、結構、振り回されたりします。無茶振りされるときもあるかもしれません。

でも、私はこうした方々とたくさん時間を共有させていただき、数限りない貴重なアドバイスをいただきました。

夢や目標の持ち方、時間の使い方といった日々の行動に直結するアドバイスや、人間関係を円滑にする技、お金を稼ぐためにやっておくべきこと、経営哲学、優先すべき自己啓発、そして人生全般の悩み相談まで……。

こうして進む先がまったく見えなかった私にも、「何をすればいいのか」が形になっていき、そこに向かって進む勇気を蓄え、ようやく、「はじめの一步」を踏み

出すことができるようになったのです。



本書では、「閉塞状況から抜け出したい」「できれば仕事を楽しみながら年収もアップさせたい」「とにかく人生を好転させたい」といった数々の思いを形にしていくことを目的としています。本書でお伝えしている数々の「ヒント」や「ノウハウ」は、どれも私の実体験に裏付けされたものです。

何をやっても長続きせず、諦めやすかった私でも、周囲の人たちの力をお借りすることで、グループ年商13億の複数企業経営・顧問、コンサルタントになることができました。私でもできた、それらの秘訣のどれか一つでも、みなさまのお役に立てれば幸いです。

二〇〇九年九月

山本亮